

ISSN 2189-9290

The University of Aizu
Center for Cultural Research and Studies
Annual Review No.22, 2015

会津大学文化研究センター
研 究 年 報

第22号

2015



会津大学

2016年3月 発行

目 次

	Page
巻頭言	
文化研究センターの活動報告	菊地 則行 1
2015 年度 文化研究センター 公開セミナー報告	
・学校生活の質の向上をはかる	苅間澤 勇人 3
・セミナー概要	清野 正哉 18
研究論文	
・「文章表現法」実践報告 II	澤 亮治 19
研究・教育・活動報告	61

巻頭言 文化研究センターの活動報告

文化研究センター長・菊地 則行

「ぼくらの教養なんだぜ」

現代で求められる教養のあり方について、若者から教えられることの多い一年でした。私たちにとって、戦争法案（安保法案）は自らの命と生活にかかわって憲法や平和を考える機会になりました。そして、「憲法違反か合憲か」などと仰々しい基準で論じることが少ない私たちに、政治や社会のあり方を憲法に照らして考えてみる身近な経験となりました。そのような機会・経験を象徴するのが、SEALDs（Students Emergency Action for Liberal Democracy-s）の若者たちの、自らの文化スタイルで、若者自身にとってリアリティーのある言葉と表現方法で行ったアピールでした。メンバーの栗栖由喜さん（20歳）の発言です。「作られた言葉ではなく、刷り込まれた意味でもなく、他人の声ではなく、私の意思と言葉で、私の声で主張することこそ、意味があると思っています。私は、私の自由と権利を守るために意思表示することを恥じません。そしてそのことこそが私の『不断の努力』であると信じます」（SEALDs 2015 SEALDs 民主主義ってこれだ！ 大月書店 p.45）。教養が「市民としての連帯の背骨」（日本学術会議 2010 大学教育の質的保証の在り方について）として、問題を設定し、共有し、解決に向けて人と人、人と社会をつなげていく力だとすれば、栗栖さんの発言にある力は問題を設定・共有する力だといえます。自分の心で感じ、頭で考えた言葉・形式で問題を立て、共感的に共有する力としての教養だと思います。「市民としての連帯」のためには、「私の意思と言葉で、私の声で主張すること」が必要だからです。若者のリアルに学びながら教養教育のあり方を「ぼくらの教養なんだぜ」を忘れずに考えていきたいと思っています。

SGU、カリキュラム改革

学内では、文科省スーパーグローバル大学創成事業（SGU）の展開が本格的になっています。来年度の後期からはSGUの留学生が入学し、彼らは英語で行う授業を履修することになります。本センターでは、SGU留学生のために英語による教養科目の開講を準備しました。英語版の論理学・科学史・経済学を2016年度から順次開講していきます。また、留学生を対象としてSGU部門の教員による「会津の歴史と文化」という新たな教養科目も2016年度から開講することにしました。

来年度から学部の新カリキュラムがスタートします。それに向けて専門教育科目の内容・構成について全学的な議論が行われました。来年度からの大きな変化の一つは2学期制から4学期制になることです。一つの学期が8週間になり、週1回だった授業が週2回になります。教養、教職課程の授業の時間割を4学期制に合わせるために、センター内でも多くの時間を使って議論をし、調整をしました。

教養教育の充実

現在の教養教育の拡充を意識して、文章表現法の手直しを行いました。開講時期を後期から前期（1・2学期）と後期（3・4学期）にしました。授業内容は、論理的思考力の育成を軸として、論理的読解力、論理的文章表現力の育成を3つの柱とし、授業内容に即したテキストも作成しました。これは初年次教育（ゼミ）の開講を意識した授業内容の変更であり、授業実践の蓄積を目指すものです。

また、センターの研究・教育の力量をさらに高めるために教養についての勉強会を定例化しました。既存の教養科目の充実、SGU 対応授業・新カリキュラム・初年次ゼミへの対応を意識して行ったものです。1 回目は、菊地が、日本語運用能力を教養の重要な要素として位置づけることを日本学術会議の諸報告を踏まえながら提案しました。

公開講座

11 月 7 日、毎年開催している文化研究センター公開講座を、初めて学外の会津若松市生涯学習総合センター（會津稽古堂）で行いました。テーマは「学校生活の質の向上をはかる」でした。荻間澤先生が、以下の内容で講演されました。「現在の教育において、学力の向上や規範意識の向上などが課題となっている。それらを解決しようとするとき、個々の課題にアプローチすることと、包括的に『学校生活の質の向上』を目指して課題を相乗的に解決することが考えられる」。講演後、参加者と活発な意見交換を行いました。

センターホームページの更新と年報の電子化

本センターHP を全体的に更新し、メンバー・教育・研究・地域とのつながりをインターネット上でより積極的に発信しました。室員の O さんの尽力です。

文化研究センター年報の発行を紙媒体から電子媒体化します。1994 年度に第 1 巻を発行し、2014 年度の第 21 巻まで紙製本で発行してきました。数年前からは、年報に掲載された研究論文は会津大学学術情報リポジトリでインターネット公開しています。そして、昨今の研究公開環境の電子化を考慮して、今年度からは論文のリポジトリ公開と同時に年報全体を電子版で作成・公開することにしました。

教員の移動

今年度、教職担当の荻間澤先生が着任されました。先生は岩手県で高校の数学の教師として教育実践・研究に携わってこられたベテランです。

経済学の澤先生がこの 3 月で退職されます。4 月から筑波大学に移られることになりました。澤先生の退職を惜しむ声を学内で多く聞きました。



退職のご挨拶

澤 亮治

短い間でしたが、会津大学の方々をはじめ、関係する皆様には大変お世話になりました。深く感謝をしております。特に文化研究センターの皆様には生活・仕事に関する助言をいろいろいただき、助かりました。三年半前の 2012 年秋に赴任しましたが、すぐに迎えた冬の雪には閉口しました。当時は出勤前になぜ筋トレをしなければならぬのかなあと感じていました。ただ、会津のお酒を楽しみながらも体重が微増程度だったのは、この雪かきダイエットのおかげだと思います。会津大学では専門の経済学の講義以外に、文章表現やデータ分析の講義・卒論指導に関わらせていただいたり、復興支援プロジェクトや市のオープンデータ分析に携わる機会をいただいたりと様々な経験を積むことができました。研究分野に集中するだけでなく、今は少し広い視野で経済学を考えられるようになったと思います。会津大学での経験を活かし、今後も社会に貢献していきたいと思います。